

S君を一度前後不覺に酔はして見たものだ。」

とは同僚が何時も酒の座で云ふ言葉だ。従つて私は何處へ行つても先づ、其の土地の酒場に一番親しくなつた。R町の一番町と云へば東京の銀座通りとでも云ふ繁華な通りで、其處には多くの酒場が軒を並べて夜は明るい歡樂に輝いてゐた。その澤山の酒場の中にたつた一軒「日の出」と云ふ日本人經營の酒場があつた。主人は通稱アムールのお辰で通る俠氣な日本婦人であつた。彼女は九州天草の出身で十七の時から朝鮮、滿洲を股にかけ、西伯利亞へ來てからも十年にもなると云ふ強か者で、もう四十に手の届きさうな年増であるが、天稟の美貌と負けず嫌ひな氣質とに之のアムール沿岸に居る日本人から女親分として讃められて居た。金に窮した同胞がお辰に頼つて旅費を得て内地に歸還した者も數知れないだらう。彼女は相當に金も出來たのだから、物騒なこんな處に居なくても内地へ歸れば、一生安樂に暮して行けるだらうと思はれるのに、持前の利かぬ氣で此の町に止まつてゐるらしい。

私は二三度「日の出」に行つた時から、呑助として早やくもお辰に認められて、顔馴染となつてしまつた。一つには彼女が軍人好きであつたからでもあつたらうが、私が行く度に秘藏の灘酒

實際あの芳醇な灘酒は、西伯利亞の北端では極く稀で珍重せらるゝものであつた。——を態々私の爲めに惜しげもなく注いで呉れた。私は彼女を「伯母さん」と稱んだ。私より四ツ五ツ年の多いばかりの彼女であるが、彼女は私をまるで五ツ六ツの小供をあやすやうな態度で私を可愛がつた。赤白兩軍の反目以前迄は、日本娘の三四人も置いて、彼女自身も女將と云ふを忘れたかの如く、熊のやうなロスキーを手玉に執つてゐたさうだが、今では抱への女達も一人も居ず、皆土地の碧眼の土着人を使つて居た。

それはもうクリスマスも間近い寒い晩であつた。K方面へ軍事輸送の爲め多忙な十日ばかりを過ぎた私は久々に暇を得て、一番町の日の出を訪れた。常連の一人で「呑助」と仇名された程の私が久しく姿を現はさなかつたので、女將のお辰は十年目に逢つた吾子にでもする様に愛想よくもてなしてくれた。

「近頃、大分「赤」が入込んで居るので態と警戒して出ないんぢやないかと思ひましたよ。」親切な「伯母さん」はぎつしりと金冠で被つた唐獅子の様な前齒を突き出し乍ら云つた。

「赤なんかには恐れないんだがね。忙しいのです。」

私は慙と氣にもせず云つた。

「だつて随分、たくさん山から下つたと云ひますよ。」

「まあそんな情報も耳にせんことはないが、どうせ飛んで火に入る夏の虫さ、命の惜しくない奴がおどくし乍ら、偵察しやうとしたつて、ろくな仕事が出来ものか。」

「尼港の二の舞をやられちや大變だなんて昨夜も、豫備隊の人達が話してゐましたつけ。しかし將校を狙つてゐることだけは事實らしいんですよ。守備隊のN中尉も先日F公園で狙撃されたんぢやなくて。」

「ウム、だがN中尉は『赤』ぢやないらしかつたぜ、靴屋の亭主が人違ひで撃つたと云ふからさ。それにしたつて、何も恐るゝに足らんさ。帝國軍人がアムールの百姓や無頼漢の集團に命を取られてたまるものかハ……」

私は、もうかなり飲んでゐた勢で元氣に兩腕を叩いて見せた。

「さう云へば頼もしいわね。久しぶりに弾きませうか。」

「親切な伯母さんは、晴やかな氣分になつて、柱に掛けられた三味せんをとつて、自ら弾き初

めた。

「一日逢はねば千日の思ひに妾しや煩ふて……お唄ひなさいな。」

好きな清元の『三千歳』を唄ひ出す彼女の聲は四十の彼女を未だ十七八の處女の時代に魅へらせた。木枯吹き荒ぶ西伯利亞の北端で、清元の三味せんを聞く……斯う云ふ情緒は實際文字通り詩人ならざる私の心を動かしたものだ。私は何時もになく益を重ねた。強烈な火酒と異り徐々に灘酒のアルコール分は私の體に廻り、陶然と酔つて來るのを覺へた。「少し酔つて來たな」と私は心の中で思つた。時計を見るともう十二時を過ぎてゐた。

「あ、愉快だつた。どれも御輿を上げるとしやうか。」

私は軍刀と帽子を執つて立ち上つた。

「もうお歸り、さうね十二時を過ぎたのね、じゃ氣をつけてゐらつしやい。馬車をよびませう

かしら。」

お辰も三味を置いて立ち上つた。

「何、馬車は止さう。ほてつた頬を夜風に吹かれて歸つた方が氣持がい、さよなら。」

私はよろめく足を踏みしめ乍ら外へ出た。街道は冷く、ためにすっかり凍りついて西伯利亞名物の北風が骨にこたへる程吹き荒んで居た。私は凍りついた街道をコツ／＼と靴音高く歩き出した。流石の賑華な一番町の通りも、今は店を閉ちて人通りもなく閑として墓場のような寂しさだ。私はやがて一番町を通り過ぎて十字街の角を右に折れて一層寂しい通りに出た。すると其の時左側の高い建物の中から一つの黒い影が出て、すつと闇に隠れたのを見た。深くマントに包まれてゐたがどうやらそれは女らしい人影であつた。私は別に氣にも掛かず又コト／＼と靴を鳴らし乍ら行つた。そして五六間も行つたかと思ふ時、ふと私の後から誰か来るやうに感じた。私はふり返つて見た。しかし人影らしいものはなかつた。私は又歩き出した。コト／＼それは、ほんとうに微かな足音ではあるが、凍つた土を踏みしめる靴の音であつた。「誰か私を尾行してゐるな」私は初めてそれと氣がつくと、最前「親切な伯母さん」が注意して呉れた言葉を思ひ出した。さうして短銃の砲先をポケットの短銃を握りしめ乍らくると、體を向き返して闇をすかした。さうして短銃の砲先を闇の方に向け乍ら注意を怠らず一歩々々と後退り始めた。丁度其の時である。闇の向ふにピカリと一閃ひらめいたかと思ふと、次の瞬間ズドンと響いた。私は直ぐ側の行路樹の影に身をよ

せた。ズドン、ズドン、釣瓶おとしに撃ちつゞけて來た。しかし餘程距離があると見えて相手の姿が見えない。私は短銃を狙つたまゝ、敵の姿を發見しやうと努力した。折柄更に遠い距離で四五發の銃聲が響いて、急にあたりが騒がしくなつて來た。ドタ／＼と靴の音がしたかと思ふと、「司令官殿御無事でしたか。」と闇の中から聲がして二人の日本憲兵が私の前に姿を現はした。「お、君達だつたか。」私は安堵の胸をなでおろすと、持つた短銃の手をおろした。「危いところでした。狙撃者は今、十字街で捕へました。明朝御報告しますからそのまゝ御歸り下さい。」「いや御苦勞たつた。どうも俺も怪しいと思つて警戒したのだがね。すんでの處で殺られるところだつた。」私は斯うした場合、上官としての威容を失ふまいと態と鷹揚に笑ひ乍ら、彼等と別れて停車場へ歸つて行つた。

翌朝、朝食をしてゐるところへ、憲兵隊からS分隊長がやつて来た。

「昨夜は御遭難だつたさうでして、だが御負傷もなく結構でした。」

「いや諸君の爲めに命拾ひしたやうなものさ。だがやつぱり赤の奴だつたらうね。」

「御想像の通りです。十字街のシンパシーレストランのボーイをしてゐた奴です。元からの赤

でもないらしいですが、かなり強情な奴であれから明方まで手古すらせましたよ。エ、女装して

ゐましてね。聲まですつかり女のやうに優さしくて髪をとつて初めて男と知つたくらゐりました。

四五日以前、山から下つた赤が、日本將校を撃殺したら、賞金を與へると云ふ甘言に釣られたら

しいやうです。大尉殿の首は五萬圓だとか云ふ値ださうですよ。」

「俺の首が五萬圓。ウム此の西瓜頭が五萬圓とは随分、値だね。」

私は思はず自分の首を手でなでながら云つた。

「奴の背後には未だ二三の共犯がゐたらしいのですが、惜しいことには逃がしてしまひました。

而かも其の一人と、女装した彼奴とは大尉殿と一緒に、『日の出』で飲んでゐたと云ふのですよ。

つまり彼等は、大尉殿を其の時から狙つてゐたのです。大膽な奴です。さうして大尉殿より一時間

も前に出て『日の出』の入口に見張りをしてゐたのです。さうしてあの十字街で人通りのないを

幸に狙撃するつもりらしかつたのですが、氣遅れがしたので後から尾行して、撃つたと云つて

ゐます。幸に私達は左手のM通りから歸つて来た折柄、銃聲を聞いて駈せつけたやうな次第でし

た。お蔭で昨夜はP教會を襲ふて失敗した穴埋めが出来て大變愉快でした。

K分隊長の詳しい報告を聞いて、私は初めて思ひ當つた——昨夜『日の出』で、女將のお辰の

弾く三味せんに陶然と盃を重ねてゐた時、舉動不審な夫婦づれらしい男女が室の隅で、二皿三皿

注文した切り、かなり長い時間ひそくと話し合つてゐたが私より一時間ばかり前に、そ、くさ

と勘定を拂ふと出て行つた。別に深い注意もせなかつたが、あの時彼奴達は既に五萬圓と云ふ大

金をこの私の首に價づけてゐたのだ——私は思はずつとした。さうして酒のために危く、その

五萬圓の首を十字街頭に暴すところであつたのだと思ふと、俄に一の自重をせなければならぬ

と自ら戒めた。

美しきスラブ魂

四八

私は西伯利亞派遣中に十六名の人命を堵した。勿論戦場ではない。砲煙彈雨の裡に突撃して一息に倒すと云ふことは、容易に成し得られることである——又溜散彈なら、もつとく多く敵を倒し得ると云へる。然しそれでは平凡であり過ぎる。悲惨には違いないが餘りにもあつけない。私の倒したのは所謂赤軍の間諜とか、斥候とか、バルチサンの餘黨とか云つたやうな一人々々を處刑したものだ。従つて彼等は戦場で屍を曝らす者より寧ろ遙かに勇敢であり沈着な勇士である。年齢は十七八歳から三十五六歳迄の血氣な青年ばかりで、死の前に従容とした態度は實に感嘆すべきなのであつた。眞に壯烈な勇士の最後を眼前にする毎に私は、日露戦役の最初の犠牲者でハルピンの鬼となつた、愛國の志士沖、横川の悲壯な死を想像するものであつた。さうした處刑を行ふ毎に、私は君國の楯として盡す帝國の軍人の身を忘れて、深く大きい人類愛の前に涙を垂れたものである。彼等の肉親妻子——さうした遺族の悲嘆を先づ想ふ。敵なるが故に勇敢な志士をむざ／＼と命を堵さなければならぬ——人間としての測隱の念は染々と私の胸に

食ひ入るを覺へる。呪はしいものは戦争である。醜いものは人類争闘である。

十六名の銃殺者の中で、最もさうした私の心を動かし、今にまざ／＼と其の壯烈な死の情景を幻に思ひ出させるものはセルギーと云ふ美少年の最後であつた。彼の死はハルピンの沖、横川の最後に比して決して劣らぬものだと思はれる。私は彼の處刑に對して餘りの感動を感じて、それから四五日、好きな酒さへ斷つて少年の空しい魂に對して深い冥福を祈つた程であつた。

それはもう内地では桃や櫻の綻びる三月下旬のことであつた。

日本軍駐屯以來、一時影を失つた過激派は又々動搖し始めてトリヤピンを首領とする最も勇敢な赤軍は、アムール沿岸の全線に渡り、年齢十六歳以上四十歳迄の男子を徴兵し、其數六七千を算し、B市を去る十三露里の地點に根據を構へて、頑強に日本軍を悩ました。さうして私の居たR町にも二千餘の赤軍が襲撃したこともあつて、アムール沿岸は實に戦々競々たる日を送つてゐた。

私は毎日停車場に、二名の下士と三名の兵卒と私の従卒と都合六名は、ひつきりなしに發着する列車の事務に従つた。夜は唯一名の従卒と、停車場内の狭い室で毎夜の様々響く銃聲を聞き乍

四九

らおちく／＼寝られぬことが多かつた。

三月とは云へ廊下の敷石に凍りついた雪は石のやうに堅い、外は身を切るやうな寒い風の吹く晩であつた。私は從卒を相手に寒さ凌ぎに火酒をあほると、遂に酔ひにまぎれて二口三口戯談を云つてゐる時であつた。事務室の電話のベルがけた、ましく鳴り響いた。從卒の村田は急いで事務室に這入つて行つた。間もなく受話器を投げる様な音がして、あはたしく走つて来た。

司令官殿、憲兵隊からであります。一名の赤が、之の管内へ入り込んだから今夜の内に捕縛して貰ひたいと云つてゐます。今隊から憲兵が来るさうであります。

「管内へ赤が。」

私は火酒の盃を置くと緊となつた。

「村田すぐ宿舍の山本曹長以下皆で用意して来るやうに云つて来い。」

私は斯う命じて、柱にかけられた軍刀を腰につけると、机の引出しから、モーゼル銃をとつた。間もなく憲兵隊から一名の憲兵が断せつた。それに依ると四番町の裏通りの百姓家に一人の怪しい男が這入つて行つたと密偵の報告があつたと云ふのだ。四番町と云へば、この停車場より三

丁もない寂しい通りで、其の裏町はR川の河岸に立ち並んだ貧民部落である。元來停車場を圍繞する五丁四方は停車場司令官の管下に屬する爲に憲兵隊は直接行動を遠慮して私に其の捕縛方を依頼した譯である。そこで私は部下三名と憲兵と五人で直ぐ四番町裏の貧民部落へ向つた。憲兵は先に立つて部落のとある一軒の家の入口から這入つて行つた。

「搜索に來た。抵抗すると撃つぞ。」

と云つて這入ると大聲で嗚鳴つて手の短銃を向けた。中では五十餘りの老夫婦が隅の方でガタガタ震へ乍ら立つてゐた。室と云つても日本の六疊敷き位な廣さ一室で勿論隠れる場所とてない。

「老人、息子は何處へ行つた。」

憲兵は拙い露西亞語で早口に云つた。

「ハイ／＼倅は山からもう二十日も歸つて來ません。」

可愛想な老父は蚊の泣くやうな細い聲でおろ／＼と答へた。

「隠すな老爺。」

憲兵はいら／＼して老人の首をつかんで私の前に引づつて來た。その時私はふと其處に置かれ

た古ぼけたテーブルの上に新しい新聞包みを見た。

『其れを開いて見ろ。』

部下の下士は急いで包みを開ろけた。中には私の想像したやうに堅パンの幾つか、轉け出た。

『ウム。今夜は土曜日だな。奴明日の朝山へ歸る考に違ひない……オイ老人、隠さないで息子の居所を云つた方がい、ぜ。』

私はパンの一つを老翁の鼻の先きに持つて行つて靜かに云つた。

『オイ何處へ行つてゐるのだ。』

憲兵は大聲で嘔鳴つた。震へ乍ら老翁は、倅は四番町の角のレストランでその友達と久々にて酒を呑んで居ることを白状した。

『それ』と云ふので私達は其の家を飛出すと四番町の通りへ向つた。河岸に沿ふた貧民窟から四番町へ出る横町の角の酒場——それは之の部落の人達を客とするのだから其の汚さは想像せらるゝであらう——の前に來ると私は二人の部下を裏表の入口に配して、憲兵と私は表口より靜かに這入つて行つた。内部は汚いけれど、どんく、暖爐をたいて明るい灯の下では若い男女がピアノの

音に浮れて怪しいダンスの最中であつた。ドアを開けると私と憲兵は右手に短銃を擬して、

『手を舉げろ。』

と叫んだ。丁度活動寫真そのままの華やかな場合が修羅場に化した。室内の男女は躊躇なく双手を舉げて無抵抗を表示した。その時私の瞳は、テーブルの前に立つた美しく紅頬の美少年が、少し前かゝみになつたかと思ふと、ピストルらしいものをテーブルの下に落した様子を見逃さなかつた。

『奴だ。』

私は眼で憲兵に合圖をした。少年は直ぐ何等の抵抗もせず捕へられた。

『貴様 赤だらう。』

私は大きい聲で云つた。

『エ、さうです。しかし此處に居るのは決して赤ではありません。善良な私の友達です。』
彼は少し青みが、つた顔をあけて、はつきりと答へた。

『此奴ばかりらしいです……さあ出る。』

両手を縛してポケットを探り終ると憲兵は彼を引き立てた。友達と稱する若い男も酒場の女らしいのも皆両手を上げて、引かれ行く彼を見送つた。すると二階の階段を轉けるやうにして泣き乍ら降りて来た女があつた。さうして彼女は、縛せられた彼の前に打伏して大聲で何か訴へるやうであつた。

『此奴の色女らしい様です。』

憲兵は私に私語いた。

『どうせ明日は銃殺だ。戀人ならウント別れを惜しませてやつた方がいゝ。』

私はよく日本の壯士芝居でする、斯うした様な場面の寛大な巡查の行爲に似た氣持ちで優しく云つた。

『十分間。』

憲兵は斯う云つて彼等から少し離れた。縛されたまゝの彼と彼女は抱き合ひ乍ら、最後の別れの盡きぬ様であつた。勿論言葉のよくわからぬ私達は只其の行爲に依つて、切ない戀人同志の無殘な死別の如何に切實なるかを知るのであつた。

彼は其名をセルギーと云つて、未だ十七歳になつたばかりの美少年であつたが、赤軍の間諜として『木鼠』と仇名された程敏であつた。R市再度の襲撃を企てたトリヤピンは、彼にR市の日本軍守備の状況偵察と云ふ重大使命を命じた。彼は流石に木鼠と仇名される位な少年であつたから何處で手に入れたかR市附近の日本軍用地圖を初め、守備隊の状況を極めて詳細に認めた報告書を其のズボンの裏に縫ひつけてゐた。私は徹宵彼を取調べた。さうして最後に、

『貴様を死刑に處す。』

と通譯を通じて宣告した。彼は心持ち顔を土色に變じたが、すぐにつこりと笑つた。その落付いた大膽な態度は憎い程私の心を動かした。戦時の事として、死刑の宣告を與へると二十四時間の内に刑の執行をするのが例であつた。私は餘りに勇敢な之の少年に對して、例を破つて刑の執行を三日間も延期して彼を事務室に隣る物置場に置いて、三度の食事を特に炊事に命じて、御馳走を與へた。尙戀人のニーナーに面會させるなど、常でない寛大な處置をとつてやつた。彼は私の厚意を深く感じてか、物置の窓から私の姿を見ると、

『司令官、感謝。』

を繰り返すのであつた。彼は監禁の三日間に、二十ばかりの詩と自叙傳風の五十枚ばかりのものを書いた。彼はゴルキーの崇拜者で、ニーナーの差入れた『居酒屋』を最後の日まで耽讀してゐた。

いよいよ最後の日が来た。四日目の夕方、彼は郊外の夕陽ヶ丘の銃殺場へ引かれることになつた。中腹の西側の凹地にたつた一本白樺が空高く立つた下に、雪の下を三尺四方の穴は掘られた。彼は此處に日を背向きに立たせられた。さうして眼かくしをしやうと一人の兵士は布を持つて近づいた。

「閣下、どうか私を前向きにして下さい。さうして眼かくしを止めて下さい。勇敢な日本兵士に是非、スラブ魂の最後を見て頂きたいと思ひます。」

彼は通譯を通じて私に云つた。なんと云ふ男々しい言葉であらう。私はすぐ彼の云ふまゝにすべてを許した。

「閣下、もう一つ私の願ひを容れて下さい。私に對する第一弾を閣下自らの短銃で願ひします。閣下のやうな慈悲深い人の第一弾は、名もなき私の死を如何に光榮にするかお許し下さる

ならば。」

私は知らずく涙が頬を下るを覺へた。そして私は軽くうなづいて見せると彼は、につこりと寂しく笑つた。用意は整ふた。私は装彈した銃を構へた。五人の部下の右翼に立つと短銃の狙いを定めた。なんと云ふ男々しい態度であらう。彼は夕陽を真向ひに浴びて、顔を心持ち空に向け乍ら、自作の詩らしいものを聲高らかに歌ひ出したではないか。

『撃つぞ。』

私は日本語で云つてズドンと引金をひいた。續いて五人の部下は一勢に撃つた。私は正しく彼の心臓を狙つたのだ。死骸は直に掘られた穴に埋めて、「セルギー十七歳」と認めた小さい木標は立てられた。

私は之の壯烈な少年の死に深い激動を感じて一週間は、飯より好きな酒を斷つて、毎朝、夕陽ヶ丘の彼が屍に手向けをしてやつた。更に此の物語の最後に、此の少年が私と最後迄因縁深かつたことを話さなければならぬ。

それは彼に死別れた戀人のニーナーが、その後間もなく私の停車場の給仕として雇はれたこ

とである。毎朝私が停車場に姿を現はすと、彼女はセツセと窓硝子を拭く手を休めて、丁寧に頭を下けるのであつた。又炊事場からよく私の爲めに、コ、アやチヨコレートを運んで来るのであつた。さうした度私は彼女の心の内を想像して、測隠の念に堪へなかつた。

「司令官殿、奴の持つて来る茶に氣をつけないと、うつかりすると毒でも入れるかわかりませんよ。」

従卒の村田はよく注意した。しかし彼女は私がR町を引揚げるまで、驛の給仕として、その美しい姿を毎日現はして、忠實に働いてゐた。

ハルピンの夜

「ハルピン」の名のなつかしい思出は、日露戦争当時小學生であつた私に「奉天城も攻め落し」

「やがて日の丸ハルピンへ」の軍國いろは歌留多の文句として印象づけてゐる。
沖、横川兩勇士の壯烈な最後の永遠に戯曲的史跡として、又明治の元勳伊藤博文公が鮮人のピストルに倒れた處としても忘れられない地である。

日本にゐる時よく聞いたものだ。ハルピンは東洋に於ける市俄古、一面巴里とも稱せらる。異國的情緒に深い街である。ハルピンの夜は市俄古の怪奇と、淫都巴里の歡樂とを、支那獨特の陰慘とで織りませた、世にも不可思議な色彩を放つ東洋の魔都であると、

だがハルピンの現實は餘りにも私の瞳を寂らしめ、心を幻滅に誘ひ入れた。

其處は氷に閉ざれた松花江の河畔に立つ眞黒な汚い貧民長屋に過ぎない。喧騒と臭氣と、油濃、動物的な色彩と音響、苦人と裸足の腕車と、汚い馬車との泥棒市場である。アメリカの都會の場末にある黒人街や支那人街より遙かに汚く、非文明的な街である。テンポの、のろい疲れた歐羅巴文化で、世界的不潔な支那民族の傳統的生活をコンデンスした、二十世紀時代の神から既に忘れかけられた北滿の夜露に冷く氷り行く街である。

その主要街キタイスカヤ街を行く。

黒い露西亞風な建物と、凸凹した歩道、安っぽい佛蘭西風な店舗、赤い紙の看板、狐の毛皮に包まれた肥つた狡さうな女、灰色の長い外套を引きつづて行く長靴の男、夜着のやうな厚い綿入で背を丸くした熊のやうな支那人の男、雉子の頭みたいな靴に、纏足をよちよちと運ぶ支那女、

口笛で喇叭パンツにチャールストンを踏む、ヤンキー風な青年、黒い帽子のつゝ、ましやかなオー
ストリアの貴婦人らしい女、丈の低いその癖小柄かしさうな日本人等、等。

酒場、カフェー、支那料理、活動、寄席、ジャズの狂騒、ダンス、煙草、酒、女、犬、腕車、
馬車、自動車、拘摸、悪漢、ピストル、喧嘩、等、等一切に世期末的な灯りと夜露がひろがり、
悲しい享樂の狩獵者の暗い行進曲が奏でられてゐる。

北歐風な圓形の建物デカダンス活動寫眞館の前の雑踏を脱れて、右に折れその裏通りの入口
の暗い小さいカフェーに這入る。がらんとした廣い店先の間を過ぎて、青い露西亞更紗のカーテ
ンを押して這入ると、暖爐の暖かさに室のやうな匂ひが鼻を衝く。室は精々三十疊にも足らぬ狭
さ、三尺位な通り道を作つてぎつしり置かれた卓と椅子。

客は一杯である。ゴルキーの『居酒屋』にでも出さうな厚い外套の露西亞人の御客である。

正面横手に五六人のジャズバンドがしきりに、狂人曲を奏してゐるが舞踏場とて別にない。酒
を命じてチビくやつてゐると、やがて室の電氣が次第に淡紅色に薄暗くなつて、左手から一群
の女が現はれて、白魚のやうに暗の中を泳ぎ初めた。二組に分れた白魚の群は、次第にその卓と

卓の狭い通りを前進して私達に近づいた。間近くなつて見ると、はて何んとこれは又物凄
身に一物もつけぬ彼女達ではないか。蠟細工の裸人形か、南歐の博物館などで見られる大理石の
彫刻か、石膏のやうな白い彼女達の腕が、足が淡紅色の弱光の闇を魔物のやうに動いてゐる。

ジャズがはたと止まる。

女達は夫々その手近な空席に腰をおろした。酒が新たに彼女達の爲めに運ばれた。再びジャズ
が始まる。

女達は夫々客と一組になつて、その狭い通りを踊り始めた。踊りは五分の休みも待たず次へ次
へと續けられる。すると次第に客も女の數も減つて行く。踊りの裡に要領を得て退場するものと
見える。

外へ出で、馬車で出てつた街上を傳家甸の正陽街に行く、支那人部落として一番繁華な街
である。永樂樓？の二階に上る。火炮爐と云ふよせ鍋に舌鼓を打ち酒を嘗めてゐると、薄い空色
の絹服を着けた美しく十六七の妓が二人、耳環の寶石をキラ／＼光らせて這入つて來た。綺麗
に額に揃へて下げた前髪、書いたやうな細い眉毛、少女らしいふつくらとした兩頬、殊に其の皮

膚の色が象牙のやうに滑かである。

やがて一人が椅子に腰をおろすと脚を組んで琵琶のやうな蛇味線を取り上げた。汚い黒服の苦人みたいな青年が入口の架に座して胡弓を弾き始めた。今一人の妓は胸に両手を組んで唄ひ出した。

胡弓と蛇味線と、猿のやうなキー／＼云ふ聲との不思議な合唱が私達の耳を驚かせた。たが何んと云ふ悲しい頹廢的な哀調であらう。

『だが此の妓達は之れでもう日本式に云へば中姐さん株ですよ。十二三歳位から一人前ですから、それに支那の藝妓は、異國人の客を取る事を嫌ひましてね。もつとも彼女達が性來嫌ふ譯でなく、一度異國人に接した妓は、狗臭いとか何んとか云つて支那男から嫌はれるからですが、支那の藝妓は金がかゝりますよ。服装にね。御覽なさいこの妓の指環でも耳環でも、大きなダイヤモンドでせう。靴だつて紫翠の飾りです。だが支那のバトロンは、思ひ切り女に金を費ひますからね。つまり女に甘いんでしやう。』

案内役のM君は話して呉れた。

午前一時！

私達は更に此處を出て腕車に乗り、暗い道をくね／＼曲つてやがて狭い長屋のやうな街に行つた。此處は曲輪らしい。狭い二間足らずのこぼ道で同じ構造の土蔵のやうな支那家屋が並んでゐる。入口の土間には、中央に花を盛つた大きな陶製の花瓶を置き、その廻りにきつと四五人の顔の白い女達が腰かけて、表の方を向き乍ら通行の人に聲をかけてゐる。

その一軒に這入る。店の間を通り抜けて二尺餘りのやつと、體一つが通れる位な暗い土塀と土塀の間に行く。冷たく陰氣な空氣が襟首にひやりと感じて、穴倉か船底でも行く氣持だ。案内されたはその最も奥らしい一室で土間の六疊敷位な室に細々とした洋燈の光りに浮び出た。そこは隅に一疊位な寢架、穢れた木枕が一つところがつてゐる。海鼠色の壁には、ベタ／＼と例の『天下泰平』や『幸福入門』等の赤紙が雑然と張られ、小さな柿色の架が二つあるばかりで冷く物寂しい。

やがて赤い服を着けた十四五の眼の大きい鼻の平たい少女が、煤けた茶碗を盆の上のせて、よち／＼と運んで來た。M君は何か支那語で云つた。此の女が娼婦らしい。それにしても餘りに

處女々々として慘々しい。少女はやがて月琴を持つて来て弾き初めた。歌ふ聲が破れた鼓を叩くやうな重くるしいメランコリーなバスである。調子がやはり哀しく憐れである。歌が終わると私達はその少女に一圓の支那札を與へて外へ出た。寒い北滿洲の夜更の風が、アルコールの燃料がやうやく切れかけた、私達の腹の中へ染みくと染み込んで来るのを覺へて思はずぶるくと震へた。

附 録

伊太利の紅かん

麥島の背景、木の蔭で一人の農夫が、ヱキオリンを弾いてゐる。鼻の赤い四十男だ。其處へ村役人らしい鯨髯の男が出て何か云ふ。手に棒を持つてゐるから或は巡査かも知れない。

農夫は無心にヱキオリンの音に酔ふてゐるらしく、弾きつゞけてゐる。巡査は近づいて大聲で叱る。農夫は一寸それに臆をやつたが弾く手は止めない。怒つた巡査はいきなり、ヱキオリン

を農夫の手から奪ふ。取られまいと農夫はあせる。双方引張合ふとたんに、ヱキオリンは二つになつて農夫の手に棹、巡査の手に胴と引き離された。農夫は泣きさうな顔して呆然と手の棹を暫らく眺めである。勝ち誇つた顔が何か罵り乍ら、手にした胴を大地に叩きつけて行かうとする。すると農夫、にやと笑ふと手の棹を横にして唇に當てた。不思議、愉快なハモニカの行進曲が吹き始められた。

ぎよつとしてふりむいた巡査、農夫の唇を見て驚ろく。近づいてその不思議な樂器を奪ふ。大きな聲で嗚鳴り乍ら、此男は音樂狂か何かで、巡査がそれを止めさせるものらしい。

すると農夫はうらめしさうな顔して、それを見送つてゐるが、うなづいて巡査が脇に挟んだ棒をそつと抜くと、いきなり口へ當てた。今度はクラオネットの音だ。巡査は再びふりむいて驚ろくと、棒を奪ふ。自分で不思議さうに眺めて吹いて見たが鳴らない。観客はどつと笑ふ。すると農夫は其處に置かれた鋸を手にとり、膝の上に置いて片手で弾いた。心よい金屬性のリズムが、次第に擴がつてゆく。巡査はもう叱るのを止めて、その音色を聞き澄してゐる。其處へ下手から若い女が自轉車を走らして來た。走らしてと云ふより歩かしてと云つた方がいゝ。よろ／＼とジ

グザグととても危い、巡査と農夫は避けるに困つた恰好だ。止まれと巡査は叫んでゐるらしい。その内、二三度舞臺をよろけ廻つた自轉車は、立木に當つて倒れる。が女は曲乗りの名人と見え、どんと巡査の胸に抱きつく。

農夫は笑ひ乍ら毀れた自轉車を起した。把手が抜ける。彼はにやとして、その端を唇へ當てた。サキソフオンの音となつた。巡査と小女は驚いて側に寄る。農夫は巡査に喇叭を渡す。そして前輪を脱して指で鳴らす。立琴の音である。それを小女に與へる。後の輪を脱し、タイヤと一處に口にあてると、お、物凄いバスである。そこで當然三人の合奏が始まつた。賑やかなジャズ曲の中に幕。

不幸なる事に、伊太利語の判らぬ私は、彼等の動作で、推察するばかりであつた爲め、劇としての味は判らなかつた。が要は彼等の變つた曲弾き曲吹きの音楽に在るので反つて無言劇として見た方がよかつたかも知れない。

且つて江戸時代の三味せんの曲彈で有名だつた大道藝人「紅かん」と比べてこれこそ伊太利の「紅かん」と云ふ處であらう。

現代得戀術

ある劇場の樂屋、花形女優の部屋である。鏡に向つて今女優は熱心に顔作に餘念がない。入口の扉を叩く音がして、絹高帽に、禮服手袋をはめた手に、一束の花を持つた洒落男が、にやとし乍ら姿を現はした。女優は一寸ふりむいたが、直ぐ又鏡に向く。男はてれたが花束を卓の上の花瓶に挿し、椅子に腰をおろしてケースから巻煙草を出して吸ひ始める。

やつと鏡から離れた女優。

「いらつしやい、男爵。」

「今晚は。」

男は嬉しさに云つた。察するに彼は彼女のバトロンらしい。

「素晴らしい人氣だね、今度の舞臺は。」

「……………」

それから男は、種々と憐れけに女を口説く。が、女はどこ迄も冷淡である。火のやうに眼を燃

した男は、矢庭に女に飛びかゝつて接吻をしやうとして、脆くも其處に押倒される。女は虎口を逃れて上手の部屋へ消へて行く。倒れた男は力なく起き上つた。蒼白な顔だ。綺麗に分けた髪がむしやくしやだ。口の中で何か云ひ乍ら、隠しから銀色の金具を取出した。短銃である。女を殺すのかな。ではない、ひよろ／＼と立ち上つて椅子に依ると、いきなり砲先を額に當て、どんとやつた。自殺した。さりとて狭量な色男だわい。音に驚ろいて女優が出て来る。男の姿を見て誇張した驚きの表情、だが誇張ではなくどうやら眞實らしい。始めて男の眞心を知つたらしく女は其の屍にすがつてさめ／＼と泣く。

観客は否、此處では讀者であるが「之れが芝居である。やがて狂言に自殺と見せた男の屍がむく／＼起きて二人が相擁して所謂幸福な幕だらう」位に簡單な想像をしてはいけない。そんな平凡な現代得戀術があつたものではない。舞臺は之れからである。

扉の外ではたゞしい人の足音がする。女は、はつとして屍を衣装トランクの影に引きづつて行つて隠す。露み出た死體の脚を両手ではね、ほつとした次の瞬間である。

「ワ……有難度い。」

と観客席の右の椅子から、一人の男が立ち上ると急いで舞臺に飛び上つた。絹高帽、禮服、今死んだばかりの洒落男の姿である。観客は餘りの早業に眼を見張る。こいつ、ケレン上手の左團次の早返りそつくりだ。だが間髪を入れぬ早業で観客席から出る處なぞ、ビードロで、花道から浮上り九字を切る仁木彈正などより遙かに神秘的な業である——と私は思ふ。

驚いたのは、観客より當の舞臺の女優である。

「驚かなくてもいい。あれは僕の研究した生靈の悪戯さ。」

男は愉快さうに笑ふ。迷つた観客は或はさうかも知れぬと肯定する。

「兎も角、貴嬢の眞實を知ることが出来た。さあ一緒に教會に行かう。」

と女を抱く、

「待つて」

と女は両手でそれを遮り乍ら扉の方へ眼をやる。反動でよろ／＼と、衣装トランクの横へ後退つた男の胸にトランクの裏からぬつと出た両手が觸れたと思つた瞬間、がたと男は倒れてトランクの影に身を隠す、と同時に髪を亂した死體の様をした彼が、すつくと立つ。その間寸秒も

ない早さである。

向き直つた女は再びきあつと云つてその場に倒れる。男は女を介抱して、やがて二人は結婚すべく教會に行くことになる。男は髪を撫で帽子を冠り、女は外套をつけて腕を組んで出やうとする。

「待てッ」

これは意外、トランクの影から現はれたは今一人の男、——観客は初めて一切の手工品の種を知つてほつとした。女は驚いて双方の顔を見る。なんと映畫の一人二役をつくりな此の二人である。二人は相互に男爵だと云ひ合ふ。女は迷ふ。結局時計の裏蓋に張りつけた彼女の寫眞を持つてゐた男——観客席から飛出した——が眞の男爵であると判り彼は約束の五十ギニの札を偽男爵に渡し女と抱き合ふ。偽男爵は彼に瓜二つの顔をした地下鐵人夫であつたのを男爵が買収したものだ云ふ。

幕外に出た男爵に扮した俳優が靜かに云ふ。

「皆さん。かゝる方法で戀を得ることは如何でせう。」

観客は拍手の波と共に口々に叫んだ。

「素晴らしい現代的な得戀術だ。」——英國——

ホールド・アップにあつた話

魔都シカゴ

私の外遊中に遭遇した盗難譚です。

皮肉なことにそれが『私の男爵様』とモンテカルロの旅館の給仕に稱べられたり『金持で氣前のいゝ東洋の殿様』とローマのタキシ―運轉手に賞められたりして、とてもブルジョアらしく優遇を受けたヨーロッパの旅先でなく『貧乏な日本留學生』でゐたアメリカで、しかも御叮嚀に二度まで實にあつさり、掠奪されて仕舞つた意氣地ない話です。

ですから、歸つてもまだ、家内の者にさへ話さない、私としては、超最大の恥話なのです。最初はシカゴです。

千九百二十七年の春は朧夜の十一時過ぎでした。世界の魔都シカゴでは、夜更けの一人歩きは一番危険とされてるます。が、シカゴへ来て半年にもなる私であるのに、夜の一時二時、外出先から歸る晩があつても一度も、この名物『戦慄すべき掠奪』に遭はなかつたのです。その癖毎日の新聞にはこの犯罪の種の切れるやうなことはないのですが。

で私は何アにと、たかをくくり、もし出逢つたら柔道で——實は柔道だつて中學時代に少しやつただけでそれも巴投げ一點張位なものです——と氣にも置かなかつた次第です。

で、その晩は映畫館シカゴで封切りの『ボルガボートマン』か何かの映畫を見、K君に別れて電車を北47番街の角の藥舗の前で降り、45番街の下宿へ向けて眞直な道をコツ／＼と歩いて行つたものです。すると二區目の辻の古い建物の下で三人の男が寄つて、ひそ／＼話してゐました。通りかゝつた私の前へ、いきなり一人の男が、

『火を貸して』

と、鼻先へ巻煙草を突つけたものです。丁度私はつい先刻電車を降りると、ラツキーストライクに火を點じたばかりだつたのです。で、

『どうか』

と、何の氣なしに銜へた煙草を差出すと眼深く冠つた烏打帽の下、鼻のやうな二つの眼がきよろうりと鋭く光つていきなり、

『手を舉げろ』

澁い重くるしい最低音です。と同時に横腹へ押しつけられた棒状の壓迫です。眼を下すとニツケルの光りです。短銃！

『おい手を舉げろ』

私は周章で、兩の手を肩の邊に舉げたのです。男は右手で私のポケットを探り財布を抜き歩道の端に立つて口笛を吹いてゐる相棒——恐らく警戒してゐるのでせう——の一人にホイといつて投げてやり、更に私のチョッキを探るやら袴の兩ポケットを探るやら果ては革帶の下にぶらさけた徽章付きの時計を出して掌につけて一寸見たが、それが學生用の弗時計だと知ると、

『フン』

と鼻先で笑つて再び私のポケットへ返しました。

「ほかに何かないか」
と少し優しい聲です。

「無い」

と答へると、

「O・K」

と二人の相棒に合圖のやうに云つて急ぎ足で向ひの靴屋の露路へ消えて行きました。

全く、あつけない話です。ほんやり彼等の後姿を見てゐましたが、やつと氣がついた時は兩の手を舉げたまゝの間の抜けた姿の私でした。盗まれた財布には二十弗餘りの金と、一枚の白銅貨電車割引券とでした。

だが、後からいくら考へても柔道で投げてやらうなど、いふ。餘裕ある考へどころか手を舉げてゐるながら恐ろしくも、口惜くもなく只慢然と彼のなすまゝに成つてゐたやうでした。

眞晝中の遭難

第二回目は翌二十八年の正月、場所は米と綿と石油で名高いテキサスはヒューストン市の主要街で、しかも眞晝中の遭難です。

その日は丁度テキサス大學のO君に案内されて美人投票で有名なギャルベストン港へ行き、丁度折よく碇泊してゐた國際汽船會社のB丸に招待され、久しぶりに日本食と日本酒の御馳走になり、ヒューストンに歸つたのが午後三時過ぎ市役所前で電車を捨て、O君に別れて賑やかな主要街の人混みを泳いで、やつと萬能館といふ活動小屋と、北京樓といふ支那料理店の角を曲つて、ホテルウエリアムペンへ急ぎました。

するとこの活動小屋の前に立てられた大きな寫眞看板、馴染深い日本人の笑つた顔です。おやと思はず立ち止まり、見ると『プリンス・トキヨウ。東洋一の曲藝師』ださうです。

「おい、君。日本紳士」

いきなり肩を叩かれて、ふりむくと眼の黒い綺麗な顔したメキシカンの青年です。カーボーイらしく鍔廣の帽子に兩方のもみ上げを頬の邊まで長く伸ばしてゐます。

「實は君に少々金を借りたいんだが」と、

にやりとしました。此の美青年がと私はあきれて彼の顔を見詰めました。

「兎も角行かう。歩きながら話さう」

彼は私の肩に右手をかけ、左手の短銃を上衣の下から私の腰の邊へ、ぐつと突きつけました。私はどきつと、始めて吾に返りました。が次の瞬間隙があつたらと唇を噛みながら彼と歩き出しました。

一區行くに交番です。銀色のヘルメット帽を冠つた巡査が石膏細工のやうに立つてゐました。往來の人は文字通り織るが如しです。だが私と彼とは恰も仲のい、友達の如く見えたでせう。

「君は呑んでゐるね。ホキスキー？」

と彼は鼻をうごめかしながらいひました。

「とても臭いよハ、ハ、」

大聲で笑ひながら、とうとう巡査の前を過ぎたのです。だが私はどうすることも出来ませんでした。腰へ當られた短銃は私に間髪の間も発見させぬほど堅く附いてゐます。

右へ曲つて静かな住宅街、其處の空地の煉瓦の積まれた蔭まで來ると、

「手を舉げろ」

です。さうして財布に時計に、ネクタイピン、上衣の内隠しに隠めた船で貰つた、ポケットホキスキーの角瓶まですつかり奪つて、

「サンキユウ」

と叫んだと同時に、びしやり大きな平手で私の左頬を嫌といふほど撲りつけました。餘りの不意に、よろ／＼とした私頬をおさへて、

「畜生」

と叫んだ時には、もう彼の姿はありませんでした。

「ウム」

と、紫色の唇をふるはして兩の拳を堅め口惜しさに地團太踏んだ恰好は、皆さんの御想像におまかせ致します。

普通、掠奪は被害者が彼等の豫想した金額より遙に少額、或は文なしであつた場合に限り彼等として命がけの仕事が無駄にした腹いせに短銃の柄で撲りつけるといふのが例です。

私の場合は金も相当——四五十弗はあつたでせう——時計も日本で買った金剛だし、禁酒物のホキスキーといふ景品までつけて提供したのに無情にも頼まで撲りつけたのは全く眞晝ではあり姿をくります彼の手段だつたかも知れません。

後で考へると、どうやら腰へ突きつけた短銃も、マドロスパイプではなかつたかしらとも思はれます。

兎も角よく外國で日本人が掠奪を柔道で投げた話がありますが、私の柔道は一回とも何んの役にも立ちませんでした。

チツプ物語

旅行者の一番煩はされるものは恐らくチツプであらう。

元來チツプと云ふものは、變な心理状態を誘ふものだ。定額より澤山にやれば相手が非常に悦んだ表情をする。いやしない迄も其時の此方の氣持がい、軽い誇りに似たやうな感じさへ湧く、だがその瞬間を通り越すと例へばホテルのボーイにチツプを與へて、其のホテルを出てから自動

車に乗つたとする——すると「俺としては少しチツプが多過ぎたかな」などと變な悔悟をするやうなことがある。人間の持つ淺ましい根性だ。

だが反對に少くやつたとする。又は相手が當にしてゐた場合に、一文のチツプも與へなかつたと云つたやうな場合には何んだか自分の心の中を見抜かれた様な氣がし、自身を蔑すむ不快さに襲はれて折角愉快な旅も不愉快になる。

先づ我が國海外旅行者が受ける最初のチツプ難は、船が目的地に着く前日の晩から始まる。外國船ならば別だが、日本の船と來ると船員が同じ日本人だから困る。私達の郵船〇〇丸が愈々明朝は桑港に着くと云ふ前の晩、同じテーブルの金田ドクトルが夕食の卓で、先づ此の問題を持ち出した。

「さあ、何分私達は初めての旅なもので」

と、文務省から視察にゆく畑さんも、紐育の銀行にゐる夫を慕うてゆく田村の奥さんも私も皆一様に云つた。

「僕はこれで三回太平洋を航海してゐるが、毎回チップ問題には弱らされますよ」
 金田ドクトルも實際困つた風である。結局隣のテーブルに聞き合はせる事になつたが、隣は「トーマスコック」の觀光團だから、一寸まつい。さりとて無闇に斯んな事を一つ一つ他のテーブルに聞き歩くのも變だ。困つた揚句、東京に永住の米人宣教師に聞いたものだ。すると彼は「室給仕に三弗、風呂番に二弗、卓給仕に三弗、酒場とデッキ各一弗、ザッオーライ」とあつさりした返事。

「毛唐は勿論少いさ、と云つて僕達は日本人だからね」

と特に日本人だからね……に力を入れて怨めしく思ふ。到頭、室ボーイに十五圓テーブルに十五圓、風呂に十圓、酒場と甲板に五圓宛つまり合計五十圓、船賃三百弗の約一割と決した譯だが愈々桑港へ着いて税關で荷物の検査を受ける時、畑さんが急に蒼くなつて、

「重要書類を入れたスーツケースが見えない」

と騒ぎ出した。

「大變だ」と室のボーイを呼んで来て問ふやら、検査場の澤山の荷物を探すやら、畑さんは泣

き面をしながら晩方迄かゝつてやつと探し出した。其晩、小川ホテルで畑さんはつくづく私に云つた。

「田村の奥さんは三十圓、金田さんも大方二十圓位室のボーイにやつたさうだ。正直に十五圓出した僕だけが馬鹿を見たよ。どうも、僕がチップをあのボーイに渡した時、奴、不足らしい顔をしてゐたからね。」

正直のところ、私も二十圓奮發した。結局船賃一割の申合せは見事黙殺され、正直に實行した畑さんだけが迷惑を蒙つた譯である。

二

桑港の第三停車場から友人に送られて南の旅に出ることになつた。汽車はS・P、サウザンバシフィックで、私としては米國に於ける最初の汽車旅行だ。

「さうだね、一日五十仙宛やつたらいいだらう。長い旅だし、それに日本人だから乗つた晩に一度にやつた方が萬事に氣をつけて呉れるよ」

と注意して呉れた友人の言葉を私は正直に實行した。其夜の寢臺を設けに來た丸い顔のニグロ

の給仕に、こつそりと大きい一弗銀貨を三枚——約六日間のチップとして渡した。さうして小ブルジョアらしい得意げな顔をして寢臺に寝ころんだものだ。

さて、翌朝眼をさまして洗面所へ顔を洗ひに行くと給仕先生むつちりとして「御早やう」とも云はない。タオルがないので「タオルはないか」と問ふと、「皆他の客が使用して一枚も新しいのはない」と云ふ。此奴、昨日のチップが足りなかつたかしらんと給仕の顔を見ると如何にも丸い顔はしてゐるが、どうやら昨晚見たのと違つた顔だ。そこで、

「お前は桑港から乗り込んだ給仕ぢやなかつたか」

と聞くと、

「否々、私はロサンゼルスから今朝乗つたんだ」と答へる。

「へエ、ぢや昨晚のボーイは？」

「エへ、……あれは、サンタフェーで、シカゴからロサンゼルス迄のボーイです」

「チエツ！」ぢやあの給仕はたつた一晚だけだつたのか、一晚の寢臺に對して三弗のチップ——道理で奴あの黒い大きな手に三つの一弗銀貨を握つた時、妙な表情で、帽子をとつて謹しく

「サンキュー」を云つた筈だ。私は思はず苦笑せず居られなかつた。

そこで、

「お前は何處まで乗るんだ」と改めて念を押した。

「私はニューオルレアンス迄」

よし今度は、そんな手に乗らないぞと、毎日五十仙と定めて其日々に渡す事にした。何んのことはない。最初の一日が三弗、次の日から五十仙で、ニューオルレアンス迄の三日間でその半額のチップで済した。

三

セントルイスの停車場前のホテルに泊つた晩のこと——室の鏡を持つて五階の室へ案内して呉れた若い綺麗なボーイに、二十五仙銀貨一つを與へて室のソフワーに身を投けると、

「なるほどこれはナイスルームだ」

と私は御世辭を言つた。

「エ、總ての物が綺麗でせう。ナイスルーム、さうして、ナイスガール……」

とボーイはニヤツリした。多分入口の帳場の若い綺麗な女事務員のことでも云つたのだと思つて私は微笑した。やがて私は風呂に這入らうと服を脱いで風呂着に着換へてゐると、コツ／＼とドアを叩く音がする。ボーイが水を持って来たのだと思つて、

「御這入り」

と云ふと、やがてドアを静かに開けて這入つて来たは何んと世にも素晴らしい美しい女。――房々とおかつばにした漆黒な髪、眼の縁を青く色どつた唇の赤い、丁度喜劇女優のコーリンムーアが映畫のなかから抜出たと思はれるやうな女、桃色のドレスの短かいスカートの下の均整のとれた脚――

「ハロー」

と彼女はニコツとした。「これはいけないつ」私は眞赤になつて、風呂着の紐を結び乍ら思はず口走つた。そして、

「御用でしたら今暫らくして来て下さい。」

と口早やに云つた。女はその周章てた私の恰好を笑ひ乍ら出て行つた。早速ベルを押してボー

イを呼んだ。

「如何でした。ナイスガールでせう。お氣に召しましたか」と手を出したボーイに、

「馬鹿！ あんな變んな女をよこす奴があるか」

と怒鳴りつけると、たんまりチップにありつけると喜んで来たボーイが、あつけにとられて隣の風呂場に駆け込んだ。

これによく似た話。

ウエストユニオンで桑港からシカゴに行く途中、デンバー小都會で泊つた。ホテル掃除女の若い女に、二十五仙銀貨一つをチップに與へたところ、其の晩の八時過ぎ、その女が綺麗に着飾つて私の室へやつて来た。

「妾の仕事は終つたから、活動を見にでも行きませんか」

と云ふ。此奴てつきり私が澤山金でも持つてゐると思つたのだらうが、

「御厚意は有難いが生憎疲れて居るから」

と断つたことがある。後で聞いた話だが掃除女にチップを與へると、きつとかつした結果を生むと云ふ。之れなど『女難のチップ』とでも云ふのだらう。

四

英國から佛國に入る時、面倒なのはカレーの税関で荷物の検査だ、同行のYさんは亞米利加から持参のトランク二個、大形スーツケース三個を持つてゐた。それに倫敦で毛布を澤山買つて詰め込んでゐるので、尋常に税関をパスする筈はないと船中で随分心配してゐた。今一人の大學教授のSさんは反對に小さなスーツケース一個とタイプライター一臺だけの身輕るさだつた。

さて船がカレーに着いて夫々私達は荷物の検査を受け、巴里行きの列車に乗り込んだ。處が發車前十分になつてもSさんの姿が見えない。澤山の荷物を持つたYさんでさへ僅か二十分足らずで検査も終へてしまつたのにと心配してゐたが、その内列車は動き始めた。すると兩手にスーツケースとタイプライターを持つたSさんが眞赤な顔をしてブラットフォームの向ふから駈けて來る。その後から青服のポーターが何か大聲で叫び乍ら走つて來る。Sさんはやつとこさで列車に飛乗つた。さうして口早やに、

「二十法あつたら貸してくれ」

と言ふや、私の出した鞆口を奪ふ様にして金を出すと窓から投げてやつた。ヒラ／＼と十法札が二枚空中を舞ひ落ちるのを、

「感謝々々」

とブラットフォームのポーターは追かけて行つた。

「一體どうしたのだ。」

Yさんと私は一緒に尋ねた。頸の汗を拭ひ乍ら、やつと腰をおろしたSさんが、泣き出しさうな顔をして語る處によると、スーツケースは、パスしたが、タイプライターはどうしても税金を納めろと云ひ出して聴かない。「新しい品でもないし佛蘭西では二三週間しか滞在しない」と、いろ／＼説明したが勿論言葉は通じないし手眞似のことで一向要領を得ない。そこへ英語の出来るポーターが來たので、それに通譯を頼んだが、そいつが又怪しげな英語で不得要領、結局税金七十法をみす／＼支拂つたのだが列車が動き出したので駈けつけると、通譯のポーターが報酬を呉れと強請む『幾何だ』と問へば二十法呉れと云ふ『小銭がないから』と列車へ飛込んだのだと云

ふ話。

「そいつは馬鹿を見ましたね。それにしてもYさんはあれほど澤山の荷物をよくバスしましたね。」

この私の問ひに對して、Yさんは襟つたい顔をして語つた。「最初のスーツケースを開ける時、こつそりと十法札を手に握らせた。すると私が次のスーツケースやトランクの錠を開けようとする手をおさへるやうにして、オーケのサインをした。それで何んことはない、全部の荷物の税金が十法で済んだ譯だ。」

「ハ……………」

五

伊太利のナポリから、ヴキスヴヤス山の噴火口を見物に行つた。一行は二人の米國婦人と私の三人、トマスコツクの案内人の案内でケーブルカーで山頂迄達した。其處から噴火口迄約百米の處を、山頂のガイドが案内する。それはボロ／＼の服に顔中が髯のやうな六十餘りの老爺だ。

「マダム、その寫眞器を持ちませう」

と二人の米國婦人の持つた寫眞器を自分で持つたり、怪しげな英語でしきりと御追従を並べながら行くのはよかつたが、さて目的の噴火口を見物しての歸り途、私と並んで歩む彼は私の耳に口を寄せて、

「紳士、チップ フォー మీー」

と世にも奇天烈な英語で私語いた。私は可笑しさを堪へて、ポケットに手を入れた。するとその老案内人は右手を自分の腰のあたりで後向きに差出して、にやと黄色い齒をむき出した。處が私がポケットに手を差入れたのは、金を出すためではなく、煙草が欲しかつたのである。だが私はその時彼の悲しげな表情を見たので「少しやらうかな」と思はず居られなかつた。間もなくケーブルカーの停留所に着いた。

そこで老案内人は二人の米國婦人に寫眞器を渡すと、今度は、

「マダム、チップ フォー మీー」

とやつた。

「チップ？……妾達はお前にチップをやる理由はない」

と一人が云ふや、口笛を高らかに鳴らして、停留所内に待つてゐるコックの案内人を呼んだ。

「チップですか、此の案内人には私から報酬を與へてゐます。」

このコックの案内人の言葉に老案内人は「チエ」と舌打ちをして狡るさうな眼で、ぐつと私達を睨んだ。

一體伊太利はチップなども、勘定の一割半ときちんと定めて實行してゐながら、外國人と見ると不當の報酬をむさほらうとする。

「日本人は皆金持ちだ」

とお世辭を云ふ。貧乏な國から來てゐながら、日本人は見得を張つてすぐ澤山なチップを切る外國人殊に亞米利加人と來ては、相當と認めた報酬以外はたとへ一文でも金錢を勞費しない。

六

羅馬驛から、ミラノ行の寢臺列車に乗つた。若い列車ボーイらしいのが荷物を室に運んだり、サイダーを買つて呉れたり、さては、

「お疲れでしたら寢臺をつくりませう」と云ふ。なか／＼親切だ。私は

「お前は此の列車のボーイか」と問ふと、

「然り」

ときつぱり答へた。で私は「十リラ」の銀貨を一枚彼の手に握らせた。やがて列車が動き出したが、別に用もないのでボーイを呼ばず、其晩ぐつすり寢込んで其の翌朝ミラノに着いた。すると昨晩預けた寢臺券と他に「八リラ」の列車ボーイ心付と書いた領收證を持つて見知らぬボーイがやつて來た。そこで私は、

「ボーイの心付は昨晩羅馬驛で渡した筈だが」と云つた。

するとボーイは、

「列車ボーイは私だけです」

と妙な顔をする。

「ちや昨晩この列車にゐた、あのボーイは何んだ」

「それは多分驛の列車係だつたでせう」と云ふ返事。

開いた口も塞げず、私は澁々八リラを支拂つた。

次も列車での話だが今度は知らずに薩摩守を極め込んだと云ふ珍談。巴里から伯林行の急行列車に乗ったが生憎どの列車も満員、席の豫約をしてゐなかつたので室の中で立ち通し、おまけに私達の列車は、ハンブルグ行で、リエージ驛で乗替へねばならないと云ふ憂目だ。さてリエージ迄の五時間スーツケースに腰をおろして寝もやらず、やつとこさで着いた。だがどの列車も満員だ。今度は通路にさへ一杯の荷物で歩けないと云ふ有様、斯んな事なら寢臺車をとればよかつたと今更悔いても致し方ない。プラットホームに荷物を置いたまゝ、呆然としてゐると金筋入りの帽子を冠つた驛の助役とでも云つたやうな男が肩を叩いて何か云ふ。

「室がなくて困つてゐる」

と私は獨逸語で云ふと、うなづいて向ふへ行つたがやがて手をふり／＼歸つて來た。駄目だと云ふらしい。そこで私は十法の札を一枚とり出すと早速彼の手に握らせた。すると彼は私の袖を引張るやうにして歩み出した。そして寢臺車につれて行くと、ポケットから錠を出して無理押しに私を室へ入れた。

「これは寢臺車ぢやないか」

と云ふと私の言葉を遮るやうに自分の人指し指を口に持つて行き「黙つて」と云ふ顔をした。不安な氣持ちだつたが疲れてゐたので私はベットに横になるとそのまゝ寝むつてしまつた。

翌朝、切符調べに來た車掌に私はおづく／＼と切符を出したが別に「寢臺券」を出せとも云はずに、さつさと鉄を入れて行つてしまつた。それなり其の日の夕方伯林ツオ驛に着いたがとう／＼寢臺車賃も請求せずたつた十法のチップ代で樂々と寢臺車で寝そべつて、十數時間を過したこともある。

變友邂逅奇譚

これは私の歐米旅行先で逢つた舊友の消息である。十年乃至二十年目に、異郷で邂逅した彼等の變つた姿——とても日本で想像さへしてゐなかつた彼等の變り様に、驚ろかさられ、つく／＼感嘆させられた事實である。で、そのあきれたまゝを、勝手につけて此處に變な邂逅奇譚と題した次第である。

洗濯屋の親方

小林は牛込の肴町の山田と云ふ素人下宿で三年一緒に暮した下宿友達である。折襟のセビロ服にキチンと黒い蝶結びのネクタイをつけ、ホテルの立間に立つてゐるボーイ然たる恰好で、だが本人に云はせると新思想の校長が亞米利加視察から歸つて来て制定した「君達は既に立派な一個のゼントルマンである」と認めた自慢の制服である。その紺セルのセビロ服に、中山帽子を冠つて、ハンドピースとか云ふ万年筆に黒い蛇腹のパイプのついたやうな奴を肩からぶさけて、緑色の技工箱と云ふのを片手に、神樂坂の人混みを、牛込見附の壕端を、揚々と肩で風を切つて九段の齒科學校に通つてゐた。色白の美しくい顔、垂れ肩の纖弱な體の女形のやうな優しい男で、清元が上手でお召のどてら姿などでよく本田横町あたりの撞球場などへ出掛けると、きつと二人や三人のお神樂藝者がコーさんとか、なんとか白粉嗅い聲でぶさけに來ると云つた大正初期の遊蕩兒型の一人であつた。だから彼の友達と云ふのも、寫眞屋の龍さんと云ふのらくら息子だの、相場好きで四六時中、高利貸に追ひかけられてゐる明大の古谷だのと云つた、不良少年ばかりで

彼等が寄ると、若い藝者の噂か、トランプや花やボーカルの類に興ずるか、その後はきつと着てゐたマントや、羽織を近くの質屋に曲けて、昆沙門裏の二流待合に出掛けるのが落であつた。吉井勇が惚れてゐる叶家の桃奴と云ふのから腕時計を巻き上げてやつたの、菊之家の豆菊に、長田幹彦が書いてやつた扇は、斯れだのとよく小林は得意になつて話したものだ。新宿の豆腐屋の娘の丹稻子が、飛行機に乗つた噂さが新聞を賑はしたら、彼に捨てられた。牛込館の前の足袋屋の看板娘のお榮ちやんが發奮して、妾も飛行機に乗ると云ひ出して騒ぎ出した話だの、何んとか云ふ飛行機將校の愛妓次郎と云ふ少々お目出度いものにつけ込んで、洋行歸りの林男爵の令息だと稱して、その妓を裸にした銀流しめいた話など澤山に残して、學校を出た彼が、間もなく亞米利加へ留學したと彼地から高い建物の並んだ紐育の繪はがきで云つて寄こした切り杏として消息を斷つた。それからもう十年になる横濱を出帆する時波止場迄見送つて呉れた、元の下宿のお神から「是非逢つてよろしく云つて呉れ」と口傳されて、初めて彼が未だ亞米利加にゐるのかと、手帳に彼のアドレスをつけて置いた。さて桑港に着いて附近を見物すること五六日、對岸オークランドの加州大學に行つた歸途、パークレーの彼の家をタキシの運轉士を散々手古すらせて、尋ねた

が、それらしい醫院は見つかからない。瘤を起して車を降りて一軒々々尋ねて見たが何しろ、此の邊は未だ新開地と見えて廣い原っぱで、容易に判らない。赤い煉瓦造りの何かの工場らしい建物の入口で、青い労働服を着けた日本人が立つてゐたので、此邊にドクター小林のオフィスはと尋ねると、ドクター小林と二三度口の中で繰り返して、はて小林さんなら此處ですとにやと笑つた齒科醫の小林君ですよと念を押すと、イエース、ミスター小林ですと如何にもメリケンチャップらしい言葉で答へた。名札を出して逢ひたいと云ふと、どうぞと云つて、其の工場の横の八疊敷ぐらゐる木造の汚い事務所へ案内した。頑丈な木製椅子に腰をおろして、「變だなあ」を繰り返して人違だつたら、どう云はふなど、考へてゐると入口のドアを開いて「やあどうも、よくお尋ね下さいましたね」と這入つて来た男、黒い烏打帽にワイシャツの兩腕を捲り上げ、廣い褐色のコルテンのパンツを穿いた、色の黒いがつしりした小林である。「何時此方へ」と彼は、愛想よく云つて、椅子に腰を降ろすと机の引出しから、無難作に四五本の葉巻を掴み出して、どうぞと云ひ乍ら自分も一本銜へた。

「ハ……さうでしたか、ドクター小林では判らないでせう。洗濯屋の親方と尋ねて頂いたら直

ぐに判りますよ。エ、學校はやりましたよ。セントルイスの大學をね。ですが今ぢや、そのドクターオペレーシーなんて長つたらしいデグリーは何んにも役立ちません。別に何んと云ふ動機もないんですが學校に居た時、國の母が死んだと報せが來ましたが歸る譯に行かず、卒業してニューヨークやシカゴで半年餘り研究と云つた處が、まあ名ばかりで其實遊んで愈々歸國しやうと桑港まで出たのですが、國の中學で一緒だつた奴が毛唐と一緒にやつてゐた、此の洗濯工場が經營困難で二千弗の抵當に銀行に入れてゐたのを丁度、治療器械を買つて歸らうと思つて持つてゐた金で僕が譲り受けたのです。國の方の財産は妹に一切やつてしまつて、まあ裸一貫で此の倒れかけた洗濯屋の經營をつけたのです。すると意外に面白くなつて來て、とう／＼ビンセットや齒鏡で、嗅い人の齒なんかいちくる様な職業は斷然止す事にしたのです。女房ですか散々日本で悪いことをした報いで今に獨り身ですよハ……。」

案内されて工場を一巡する。大きな水槽、鐵製の丸い壓搾器、印刷輪轉機みたいな乾燥機、アイロン室では三十人餘りの毛唐や日本人の男女が、せつせと働いてゐる。グラージには六臺のトラックと、彼の乗用らしい二十六年式のオークランドと小型なセダンが納められてゐる。工場の

裏の廣い原の中央の瀟洒な平家が彼の家で、其れを圍んで木造の長屋は職工達の家だと云ふ。

「僕は毎日、ビルを書くのと電話の應答をやつてゐるのですが時には工場で器械も廻したり、トラックで洗濯物の配達もやります。洗濯屋と云ふ職業は一番下等で元來佛蘭西人か支那人のやるものですが、これでなかく骨が折れますよ。百萬弗こさへたら日本に歸りたいと思つてゐますが、なかく歸れさうになれませんよ。貴方のやうに日本では僕が此方で、やつぱりデンタルの方をやつてゐるとのみ思つてゐるでせう。よく九段の學校から此方へデグリーとりに留學に來るのが訪ねて來ますが、洗濯屋の親方にデンタルレットの話は、寧しろ滑稽で何時も驚ろいて歸りますよ。」

オークランドの支那人街の北京樓へ招待して、メデシン何とかだと稱するアルコール含有五パーセントの水のやうな支那酒をぐいぐいあふり乍ら、わが愛する十年前のモボ、今では自ら洗濯屋の親方を以つて満足してゐるドクトル小林の後身は愉快に語るのであつた。

ダイヤのピン

立派な應接室である。

恐ろしく大きなズボンを着け、黒いガウンを被つた男が、葉巻を銜へ乍ら新聞を見てゐる。

「俺の求婚告にどれほど美人が來るかな。」

にやと獨り言を云ふ。察するに彼は成金で未だ獨身らしい。戸を叩く音がする。斷髮の丸顔の氣取つた女べらくと自分の特徴を述べる、美容師である。無論彼の求婚に應じて來た一人である。次に瘦せて眼の鋭い女が來た。タイピストだと云ふ。

「忙しい貴方には是非秘書としてタイピストの必要がある。」

次の女は聲樂家だと云ふ。

「激務に疲れた時妾の藝術に依つて、貴方の頭を慰すことが出来る。」

次は看護婦である。

「朝夕脈を診、貴方の其日々々の健康状態を診察し、貴方の生命を保護する妾である。」

と思ひくゝに自分達の長所を喋る。最後にみすほらしい服装の少女が来た。

「花賣りで別に特殊な技術は持たない。」

と云つて皆から嘲笑けられる。

「どれも俺には必要で、又不必要である。斯うしやう皆で俺の手脚を引張つて一番よく引いた者を俺の妻としやう。」

と男の言葉に四人の女は、駈せ寄つて彼の手脚を取らへる。しよんほり立つて花賣娘獨りそれを傍観してゐる。

「アイソツワイドライ
「一—一—三—！」

一せいに女達は引いた。

呀ッ。二本の手と二本の脚は、彼の胸から離れ、手、脚を持つた四人の女ははずみにどんと仰向けに倒れたではないか。

起き上つた女達はあきれて手脚のない彼を見てゐるが、各々自分達が一本死持つてゐる手脚に氣がつくと、其れを床の上に投げ捨て、罵り乍ら出て行つた。

手脚をもぎ取られた男は、そこに残つた花賣女に云つた。

「お、お前は去らない。お前こそ俺の女房だッ。」

ガウンを脱いで、本物の腕と脚を出して女を抱く。

「それにしてもお前はなぜ私の腕や脚を引かうとしなかつたかい。」

花賣少女は快活に答へた。

「妾は貴方の手や脚に用はなかつたのです。貴方の胸に輝いてゐるダイヤのピンだけで結構だつたのよ。」幕

——獨逸——

二重意識者

黒板の前に神經質らしい瘦せた男が現れた。一禮するとくりと後向きになり、黒板に向つて双方の手を動かしたかと思ふと、忽ち右に New York と左に CHICAGO と現はれた。拍手が鳴る。小手調べらしい。

次に双方の手のチョウクが動くと見る間に、右に星條旗、左に英國旗が畫かれる。

AEMNEGLIACNAD と右・FIRTAANCIETY と左に書へ

『御判りでせう。』

と軽く笑つて右の下へ AMERICA and ENGLAND 左の下へ FRANCE and ITALY と解説する素晴らしい速力である。次に、

『名詞をお仰つて下さい。十個。』

そこで観客席から叫ばれた。

『花。』

黄ろい甲高い聲だ。

『結構です。』

と彼は右の拇指を曲げた。

『名札。』

『い、です。』

今度は左の拇指を折る。

『リンデヴァー』『フォード』に次いで『ダグラス』『フーパー』と人々の名が叫ばれる。『ランキー、ストライク』と煙草の名を挙げる。観客はどつと笑ひ崩れる。寶石と長い組立を叫ぶ。彼は其の度、右と左を交互に指折つた。

『ザッオール。』

彼の両手は電光の速さで黒板を走る。なんと鮮やかに両方に五つ宛、而かも叫ばれた順序にきちんと書かれたではないか。

次に彼は右で、数字の掛算、割算をやり乍ら左で、悠々と大統領フーパーの似顔を書いた。

観客はその不可思議な業に啞々と驚嘆の聲を發するばかりであつた。私の隣に居た社員らしい男が連れに云つた。

『彼がもし社員になつたら、秘書と會計士の二人分の月給をとらんだらうね。』

——亞米利加——

貞操の洗濯場 終り

昭和五年三月廿二日印刷
昭和五年三月廿六日發行

貞操の洗濯場

定價一圓六十錢

著者 島 洋之助

發行者 野澤 廣
東京市神田區三崎町三丁目一番地

印刷者 廣瀬大三郎
東京市麹町區飯田町五丁目三十五番地

發行所 博文堂出版部
東京市神田區三崎町三丁目一番地
電話九段一五四五 振替東京五六〇二六



發賣所

東京市神田區三崎町二ノ一
赤爐閣書房
電話九段一五四五 振替東京六二三八六



赤爐閣書

603
16

終

